

派遣者番号	R3K24	氏名	大坂 恵理奈
研究主題 —副主題—	高等学校英語科におけるライティング指導法の開発と実践		
派遣先	早稲田大学 教職大学院	担当教官	三村 隆男
所属	都立三田高等学校	所属長	原田 能成

キーワード：自己改善 学習方略 自由英作文 ルーブリック フィードバック

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

(1) 学習指導要領より

高等学校学習指導要領解説総則編(平成30年)では、第1章総説において、「生涯にわたって能動的に学び続けるようにすること」が求められている。外国語の教科については、高等学校学習指導要領(平成30年告示)第2章第8節において、「主体的、自立的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことを目標としている。

ライティング指導においても、自分の主張を読み手を意識して論理的に伝えることができ、生涯にわたって能動的に学び続けられるよう、自己改善していく力が求められている。さらに、書く力を養うにあたり、他の言語領域と統合しながら育む必要もある。

(2) 持続可能な指導の視点

前述(1)を実現するために、持続可能な指導の視点をもつことが重要であると考え。高等学校英語科には、限られた授業時間数など、様々な制約がある中で、4技能5領域を統合してある程度まとまった量の英作文を書く指導を行う「量的な問題」と、ICTの活用など、授業方法や使用教材を工夫しながら、主体的・対話的で深い学びを実現させていく「質的な問題」がある。双方を解決するためには、従来の指導には限界がある。また、まとまった量の英文の添削には負担がかかり、添削を中心とした指導には難しさがある。

このような問題の解決を図るために、本研究の目的を「生徒が書いた自由英作文について、ALTや振り返り活動を効果的に取り入れた、生徒の自己改善を促す指導法の開発と実践」とし、持続可能な指導を志向した。

2 研究の内容・研究の方法

生徒の自己改善を促す指導の手だてとして、指導手順及び教材の開発を行い、それらを基に授業実践を行った。

(1) 実践対象及び対象科目

都立高等学校第3学年の2学級を対象とした。

対象科目は英語表現Ⅱとし、全4回の自由英作文の授業で実践を行った。

(2) 指導手順の開発

田中(2020)の課題解決のプロセスを参考に開発した。書いた英作文を振り返り、自己の課題を発見し、その課題を解決するための方策を考え、解決のための行動に移す、という一連のプロセスを踏んだ指導手順とした。第1時に「書く活動」、第2時に「ルーブリックを活用した複数フィードバックを取り入れた振り返り」及び「具体的改善策の検討」、第3時に「具体的改善策の実践」(ALTを活用した、構成に焦点を当てたミニディベート活動)、第4時に「教員によるルーブリックの観点項目ごとのフィードバック」及び「書く活動」という流れで授業を組み立てた。生徒が得るフィードバックは、「友達と指導者からの個別評価」及び「指導者からの観点項目別の全体講評」とした。

(3) 教材開発

第2、3、4時で使用するワークシートを作成した。作成に際しては、Brown, H. D. (2000) が整理した3つの学習方略(「メタ認知的方略」、「認知的方略」、「情意的方略」)に働き掛けるタスクベースの教材を開発し、授業で活用した。ルーブリックは、「内容」、「構成」、「文法」、「語彙」、「綴り・句読点」の5つの観点を4段階尺度で評価する「Pilot Rubric for Paragraph / Essay Writing」(Nishijima, et al, 2007)を採用した。

(4) 調査方法

第一に、生徒の意識変容を分析するため、4件法による事前・事後アンケートの実施(量的調査)と自由記述による授業評価(質的調査)を行った。

第二に、生徒が選択する具体的改善策の実態把握のために、ルーブリックの観点項目ごとに13の具体的改善策を提示したアンケートを行った。

第三に、生徒の自由英作文の変容を見るため、成果物(第1時と第4時で書く自由英作文)を分析した。

3 研究の結果

(1) 生徒の意識の変容

事前・事後アンケート (n=51) について、5%水準で対応のある t 検定を行った結果、設問 A1、A2、A4、A6 (表1) において、肯定的な回答に有意な差が見られた。A5については、事前・事後ともに肯定的回答数が高かった。

表1 事前・事後アンケートの設問

	設問
A1	英語で文章を書くことが好きである。
A2	英語で自分の意見を論理の構成や展開を工夫して書くことができる。
A3	書いた文章の書き直しを繰り返すことで自分の成長を実感できる。
A4	自分のライティングの力をどのように高めたらよいかわからない。
A5	英語で文章を書いた後、文法や語彙の誤りを教員の添削指導がなくても改善しようと思う。
A6	英語で文章を書いた後、内容について教員の添削指導がなくても自分で改善しようと思う。

授業評価の記述回答では、「ライティングに対する意欲がわき、今後も勉強を続けたい。」といった意欲向上が見られる回答や、「様々な対策法を知ることができ、勉強法を見直すことができた。」「学習したことを意識して書くようになった。」「書き直すことで成長を実感できた。」「制限時間内にいかに自分の意見を上手くまとめられるか、どう説得力とともにプレゼンできるかが大切だと思った。」「英語の中でも他の分野に時間を取られがちなので、構成メモ作りなど、自分の出来る範囲内で取り組んでいきたい。」等、自己改善につながる回答が多く見られた。また、「先生と生徒の対話の多い刺激的な授業だった。」「ミニディベートがとても楽しかった。」といった授業に対する回答も見られた。

(2) 生徒が選択した具体的改善策の実態

表2は、生徒が選択した具体的改善策の人数が多かった上位2位である。

表2 生徒が選択した具体的改善策

1位	<16人が選択> ■単語帳などを使って語彙量を増やし、使いたい語彙のストックを増やす。 [語彙]
2位	<各改善策についてそれぞれ15人が選択> ■数字・データ・固有名詞などに肉付けする。 [内容] ■ひたすら (他に何か表現はないか) アウトラインを作る練習をする。 [構成] ■同じ語彙ばかり使うことのないように同意語を調べ、意識して試してみる。 [語彙]

特に語彙に関して改善を図る生徒が多かった。

(3) 生徒の自由英作文の変容

自由英作文の表出からは、劇的な向上は見られなかったが、指導者が与えたフィードバックの意味を理解し、改善している様子うかがえる英作文が散見された。

4 研究の考察

生徒はルーブリックやフィードバックを活用して振り返り、ライティング力を高めるための具体的な行動イメージをもつことができたとともに、改善意欲が上昇したといえる。本実践で焦点化した構成についても、改善のための具体的な行動イメージをもつことができた。ALTを活用したミニディベートの授業に対する肯定的回答や、生徒と指導者の対話が多い授業に対する肯定的な記述が見受けられることから、ALTの活用は、技能習得のための活動に有効であり、4技能5領域を統合した活動を実践しやすくすることを再確認した。

扱ったルーブリックについて、生徒が書く100語を超える文章を読み、4段階で評価することに負担感があった。各観点の内容を把握して評価することが難しく、何度もルーブリックを見返す必要があり、時間がかかった。継続して使い続けられ慣れるかもしれないが、そうでない場合は、3段階尺度を検討するか、フィードバックを与える回数の削減を検討する必要がある。

語彙の改善について、事前・事後アンケートともに肯定的回答数が高かったことから、添削指導がなくても改善しようとする姿勢が既に備わっており、これまでの学習の過程で語彙に関する学習方略には慣れ親しんできたと推察する。生徒が自分に合った効果の高い学習方略を見付けるためにも、様々な学習方略を経験することが重要であると考えられる。

5 今後の展望

第一に、指導手順の第3時にあたる具体的改善策の実践として、様々な学習方略を経験させる活動を取り入れる。

第二に、本研究では、自己改善を促すことに重きを置き、生徒が書く英作文にどのような変容が見られたかまでは検証できなかったため、より長期的な検証が必要である。

第三に、開発した各教材の具体的な効果検証が不十分であった。生徒に対する質問紙調査や観察を行うなどして、より詳細な検証を行う。

第四に、評価の観点についても開発する。